

# 教育実習事前指導のあり方について

## 1. 教育実習の評価に影響する要因

杉山 喜美恵

### はじめに

幼稚園教育要領が改訂され、「生きる力の基礎を育成する」という考え方に基づいた新しい幼児教育が展開され始めている。これらはとりもなおさず、家族のあり方、子どもに対する考え方、個人の価値観などさまざまな変化を遂げている社会の現状にあった幼児教育が求められ、それに答えていこうとする姿勢のあらわれであろうと思われる。当然のことながら、各幼稚園では、創意工夫を生かした個性豊かな教育課程を編成し、それに則した教育が行われつつある。教育実習は、学生自身が自己を大きく成長させ、幼稚園教師に対するモチベーションを高める機会であると同時に、そのような変化をリアルタイムで経験することができる貴重な機会である。そのような貴重な教育実習が、学生にとってすばらしい体験になるためには、養成校での事前指導というものが重要な役割を担っていると考えられる。

では、理想的な事前指導とは、どのような内容を、どのような方法で行うべきものであろうか。秋山は、『教育実習』の中で、事前に学習すべき項目として、養成校によって多様であるとしながらも、理論・制度の学習、技術の訓練、視聴覚機器の利用、実習簿の記入の方法などをあげている。また、それら以外にもあいさつ、言葉づかい、服装など日常的な常識や、各種書類の書き方、人間性を育てることなども指導すべきだという意見も多く聞かれる。このように事前指導というものは内容ひとつとっても、非常に広範であるのだが、ここでは理想的な事前指導というもの

を考えるためのひとつの手がかりとして、教育実習に対する評価（以下、教育実習評価）評価に注目してみようと思う。

教育実習評価は、評価表に基づいて実習園が行い、養成校が最終的に認定するものだが、その評価には、実習園の方針や価値観、あるいは学生の意識や、性格、実習園（指導教官）との相性など実にさまざまな事柄が反映されている。それらをひとつずつ整理することによって、事前指導のあり方を探ることはできないであろうか。

そのためには、さまざまな側面からの調査研究が必要であるが、本稿では、まず手始めとして、学生側からみた要因—学生の意識と履修科目に対する学習評価—に焦点をあてて、教育実習の評価との関連性について分析をおこなってみたいと考える。

### 研究の枠組み

教育実習評価を目的変数に、学習成績と意識を説明変数に設定してそれらの関連性を調べる。以下、それぞれの変数に対する説明を行う。

### 1. 教育実習に対する評価

当短大においては、幼稚園における教育実習を1年次の前期実習と、2年次の後期実習の2回に分けて行っている。評価は、養成校が作成した評価表に基づいて実習園が行い、養成校が最終的に認定する。今回、教育実習評

価としては、総合的な評価を3段階で行ったものを取り上げた (A、B、C)。

## 2. 履修科目の学習成績

履修科目の学習成績と教育実習評価との関連性を調べるために、2年次前期までに履修した科目の学習評価を取り上げた。幼稚園教諭免許を取得するための履修科目は、当短大では、教養科目、外国語、体育、専門科目と教職資格科目の中に組み込まれているが、調査上では、それらを大きく講義系の科目と実技系の2種類の科目に分類した。履修状況等を考慮して、前者では、教育原理、教育心理学、学級経営論、保育過程総論、保育内容総論、保育内容 (人間関係、言葉)、保育援助論、発達心理学、臨床心理学、教育心理学の11科目を、後者においては、幼児音楽 (I - 通年、III)、表現I、III、幼児美術、保育内容 (健康)、体育実技の9科目を取り上げた。評価については、それぞれの科目を3段階で評価したものである。

## 3. 意識調査

幼稚園教諭の必要資質について、1989年12月の教育職員養成審議会答申「教員の資質能力の向上方策等について」の中で、「教員については、教育者としての使命感、人間の成長、発達についての深い理解、幼児、児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である」と述べられている。望ましい資質については多くの意見があるが、秋山は、望ましい教諭の資質として、「豊かな人間性」と「高い専門性」の2項目を取り上げ、それらについて具体的な内容を述べている。それらを参考にしながら、今回の意識調査では、学生自身が判断しやすいことを考慮して、以下の項目を取り上

げた。

①教育者としての使命感→幼児教育に携わろうという希望を持った時期、現状でのその意識の強さ

Q 1. 幼稚園や保育園の先生になりたいと思ったのは、いつごろからか。

Q 2. その気持ちは今でも変わらないか。

②心身の健康

Q 3. 自分は元気な方だと思うか。

Q 9. 疲れやすい方だと思うか。

③明朗である

Q 4. わりとくよくよ悩む方だと思うか。

Q 5. 性格的に明るい方だと思うか。

④感性 (表情) が豊かである

Q 6. 感動しやすい方だと思うか。

Q 8. 喜怒哀楽が豊かだと思うか。

⑤子ども好き

Q 7. 子どもが好きか。

Q14. 子どもを見かけるとつい話しかけてしまうか。

Q16. 子どもと遊ぶのは楽しいか。

⑥音楽、美術、体育など教科についての能力に対する評価

Q11. ピアノを弾くのは得意か。

Q13. 体を動かすのは得意か。

Q15. 物を作るのは好きか。

Q12. 人前で話すのは好きか。

⑦学ぼうとする素直さ

Q10. わりと何にでも興味を持つ方か。

Q18. 幼稚園実習ではベテランの先生方から学ぶことはたくさんあったか。

⑧協調性

Q17. 幼稚園実習では先生方とうまくいったと思うか。

の8項目について18の設問を準備した。回答は、そう思う、わりと思う、どちらでもない、あまり思わない、思わないの5段階評価を使用した。

#### 4. 調査対象

東海女子短期大学児童教育学科幼児教育専攻の2年次に在籍する学生156名。

意識調査に関しては、質問紙を配布してその場で回答、回収を行った。有効サンプルは、156名中、133名であった。また、履修科目の評価についての有効サンプルは、156名である。

#### 分析結果

##### 1. 意識調査に関する分析

###### (1) 単純集計結果

まず最初に、学生の現状を把握するために、意識調査における単純集計を行った。図1は幼稚園や保育園の先生になりたいと思いついた時期についての問いに対する回答である。これによると、3割強の学生が小学生という早い時機から幼児教育に携わろうと考えていたことがわかる。また、約7割の学生がその気持ちは今も変わらないと答えている(図2)。

残りの項目については、「そう思う」、「わりと思う」を、「思う」に、「あまり思わない」「思わない」を「思わない」にまとめ、「どちらでもない」を加えた3段階とした。その結果、ほぼ全員が「子ども好きである」(98.5%)、「子どもと遊ぶのは楽しい」(99.3%)と答え

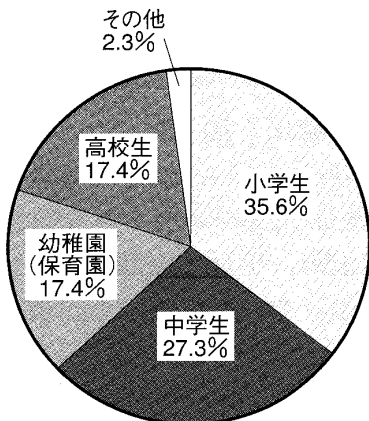


図1 幼稚園(保育園)の先生になりたいと思った時期

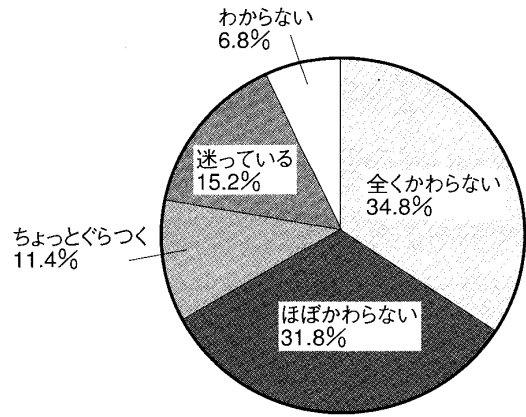
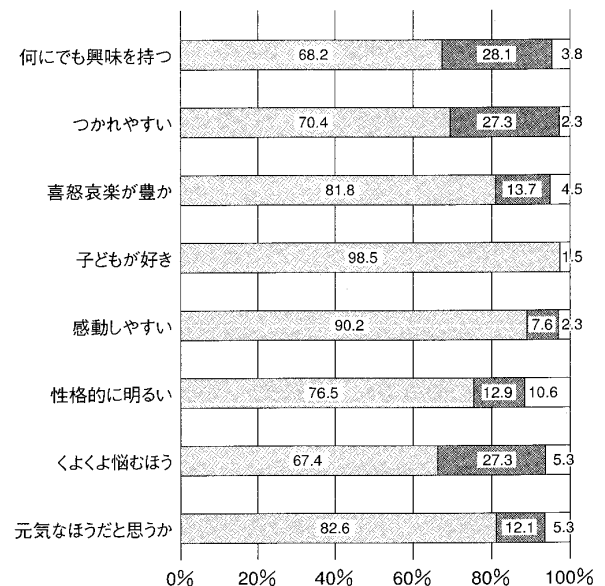


図2 希望する気持ちの変化

ており、幼児教育に携わる者の職業的条件のひとつによくあげられている「子ども好き」がほぼ満たされていることがわかる。また、性格的には、「喜怒哀楽が豊か」(81.8%)で、「感動しやすく」(80.2%)、「元気だ」(82.6%)と認識している姿が浮かび上がってくる。ただし、実技に関しては、「物を作ること」(56.3%)や、「体を動かすこと」(56.8%)が好きと答えたものが約6割であり、さらに幼児教育に携わる者として比較的重要とされているピアノに至っては、得意と答えた者が22.7%にとどまっていることがわかった。

教育実習では、78.0%の学生が先生とうまくいったと答えており、また、先生方からは得ることがたくさんあったという項目も85.2%の学生が肯定している。このことから、教育実習に対してはポジティブに受けとめて



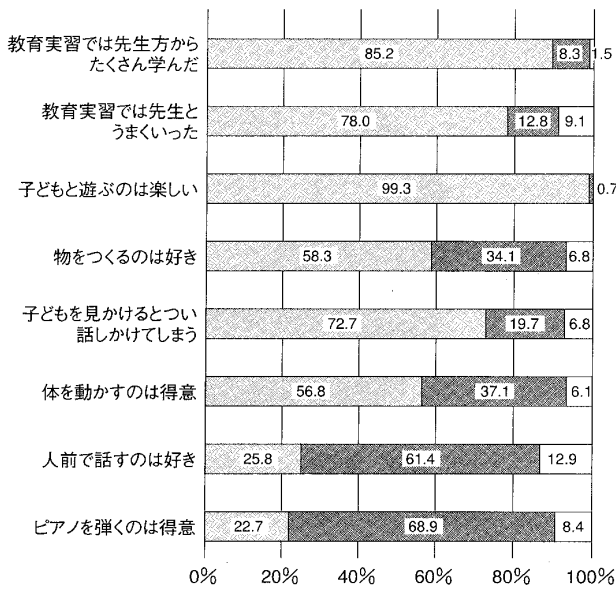


図3 意識調査における単純集計結果 (数値は%)

いるようだ。

これら18項目と実習評価とのクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定を行ったが、「教育実習では、先生方から多くのことを学んだ」という項目を除いては、今回の調査では統計的に有意な差はみられなかった。

(2) 因子分析

次に、意識調査18項目についての相互関連性を調べるために、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、3つの因子が抽出された。各因子の固有値と因子負荷

表1 意識調査項目における因子分析結果

No.	項目	第1因子	第2因子	第3因子
Q3	自分は元気なほうだ	0.920	0.465	0.057
Q5	性格的に明るい	0.727	0.328	0.356
Q8	喜怒哀楽が豊か	0.411	0.025	0.273
Q13	体を動かすのが得意	0.410	0.207	0.351
Q7	子どもが好き	0.288	0.486	0.356
Q16	子どもと遊ぶのは楽しい	0.309	0.924	0.204
Q10	何に対しても興味を持つ	0.323	0.233	0.541
Q12	人前で話すのは好き	0.394	0.232	0.438
Q14	子どもに話しかける方だ	0.317	0.163	0.537
	固有値	3.031	1.294	1.160

量の推定値は表1に示すとおりである。

これらの結果より、第1因子は、自分は元気な方だと思うか、性格的に明るい方だと思うか、体を動かすのは好きかなど、「心身の健康」に関わる因子であり、第2因子は、子どもが好きか、子どもと遊ぶのは楽しいかなど、「子どもが好き」因子である。第3因子は、

子どもを見掛けるとつい話しかけてしまうか、人前で話すのは好きか、わりと何にでも興味を持つ方かなどの「積極性」に関わる因子であると考えられる。

これら3つの因子と教育実習評価との関連を調べるために、各因子の加算平均値を意識得点とし、加算平均値の降順に全ケースを並び替えた。それぞれの因子における意識得点の高群(上位4分の1)と低群(下位4分の1)を抽出し、比較検討した。

まず最初に、それぞれの群における実習評

表2 「心身の健康」因子×実習評価

上段:度数  
下段:割合(%)

	実習評価			合計
	A	B	C	
高群	14 (42.4)	18 (54.5)	1 (3.0)	33 (100.0)
低群	8 (24.2)	20 (60.6)	5 (15.2)	33 (100.0)
合計	22 (33.3)	38 (57.6)	6 (9.1)	66 (100.0)

表3 「子ども好き」因子×実習評価

上段:度数  
下段:割合(%)

	実習評価			合計
	A	B	C	
高群	12 (38.7)	19 (61.3)	0 (0.0)	31 (100.0)
低群	7 (23.3)	20 (66.7)	3 (10.0)	30 (100.0)
合計	19 (31.1)	39 (64.0)	3 (4.9)	61 (100.0)

表4 「積極性」因子×実習評価

上段:度数  
下段:割合(%)

	実習評価			合計
	A	B	C	
高群	11 (34.4)	19 (59.4)	2 (6.2)	32 (100.0)
低群	5 (16.7)	21 (70.0)	4 (13.3)	30 (100.0)
合計	16 (25.8)	40 (64.5)	6 (9.7)	62 (100.0)

価の割合を調べた(表2~表4)。

「心身の健康」因子について見てみると(表2)、高群におけるA評価の割合は、高群、低群を合わせた者の平均である33.3%よりも高く(42.4%)、反対にB評価やC評価の者は、平均より低くなっている(54.5%、3.0%)。「子ども好き」因子においても、高群におけるA評価の割合は38.7%と両群の平均である31.1%よりも高く、反対にB、C評価の割合

は61.3%、0%と低かった。「積極性」因子についても同様に、高群のA評価の割合は、両群の平均である25.8%よりも高く（34.4%）、B、C評価においては平均よりも低かった（59.4%、6.2%）。以上の結果より、すべての因子において、高群の方がA評価の割合が平均よりも高く、反対にB、C評価については平均よりも低かった。すなわち、心身が健康であり、子ども好きで、積極性に富んでいる者はそうでない者よりも、実習評価において、高い評価を得ているという可能性が示唆された。しかし、どの因子においても、今回の調査では、統計的に有意な差はみられなかった。

そこで、各因子と、教育実習評価の関連性をより詳細に調べるため、実習評価にA評価—3、B評価—2、C評価—1という得点を与え、

表5 各因子の実習評価に対する群別平均値

		平均値	標準偏差	t 値
「心身の健康」因子	高群	1.91	0.64	2.02*
	低群	1.61	0.56	
「子ども好き」因子	高群	1.71	0.77	-1.18
	低群	1.51	0.62	
「積極性」因子	高群	1.78	0.79	-0.61
	低群	1.67	0.65	

\*p<0.05

各因子の高群・低群ごとに実習評価に対する平均値の差を検討した（表5）。

これより、第1因子（心身の健康）においては、高群の方が、低群より教育実習評価の平均値が有意に大きいことが示された。第2因子（子ども好き）と第3因子（積極性）においては、今回の調査では、各群の平均値の差はみられなかった。

## 2. 履修科目に対する評価と教育実習評価の関連性

履修科目のについては、前述したように各領域から、2年次の前期までに履修を終えた科目について取り上げた。それらを、実技系、講義系の2つの領域に分けた。各分類に該当する科目は以下のとおりである（表6）。

これらの科目の評価に対して、A評価には

表6 分析に使用した履修科目一覧

講義系	学級経営論
	保育過程総論
	保育内容(人間関係)
	保育内容(言葉)
	保育内容総論
	保育園序論
	教育原理
	児童文学
	教育心理学
	臨床心理学
発達心理学	
実技系	幼児音楽ⅠⅡⅢ
	保育内容(表現ⅠⅡⅢ)
	幼児美術
	保育実技
	保育内容(健康)

3点、B評価には2点、C評価には1点という得点を与え、実技系、講義系のそれぞれの加算平均値を算出した。それから、加算平均値の降順で各ケースを並び替えた。次に、意識調査と同様、より詳しく特徴をつかむために、実技系、講義系科目の上位者（上位4分の1）と下位者（下位4分の1）を取り出し、それぞれ

表7 講義系科目×実習評価

上段:度数  
下段:割合(%)

	実習評価			合計
	A	B	C	
高群	15 (38.5)	23 (59.0)	1 (2.5)	34 (100.0)
低群	10 (29.4)	20 (58.8)	4 (11.8)	39 (100.0)
合計	25 (34.2)	43 (59.0)	5 (6.8)	73 (100.0)

表8 実技系科目×実習評価

上段:度数  
下段:割合(%)

	実習評価			合計
	A	B	C	
高群	23 (60.5)	15 (39.5)	0 (0.0)	38 (100.0)
低群	4 (10.5)	26 (68.4)	8 (21.1)	38 (100.0)
合計	27 (35.5)	41 (53.9)	8 (10.5)	76 (100.0)

れ高群、低群とした。それらと実習価とのクロス集計を行った（表7、表8）。

その結果、講義系の科目については、両群を併せたA評価の割合（34.2%）よりも高群は若干、高い数値を示し（38.5%）、反対に低群は低い数値を示した（29.4%）。また、B評価では数値的にはほとんど変わらなかった。また、講義系科目と実習評価の間には統計的

に有意な差は見られなかった。

実技系の科目については、高群と低群の実習評価の割合は、A評価では、両群の平均が35.5%であるのに対し、高群は60.5%、低群は10.5%、B評価では両群の平均が53.9%であるのに対し、高群では39.5%、低群では68.4%と数値的にはかなり差がある結果となった。 $\chi^2$ 検定についても5%水準で統計的に有意な結果が得られた。

次に、教育実習評価に、意識調査と同様、高群、低群における平均値の検定を行った(表9)。

表9 各科目の実習評価に対する群別平均値

		平均値	標準偏差	t 値
講義系	高群	1.59	0.82	-0.064
	低群	1.6	0.59	
実技系	高群	2.05	0.65	5.289*
	低群	1.33	0.57	

\* $p < 0.05$

この結果、講義系科目では、高群、低群との間に有意な差はみられなかったが、実技科目では、高群が低群よりも有意に高得点をしめた。

## 結果と考察

本稿の目的は、有効な事前指導のあり方を考えていく上で、手始めとして、幼稚園の教育実習評価にどのような事柄が関連しているのかを明らかにしようと試みた。そのために、今回は、学生の教育実習や自分に対する意識について意識調査を行い、それにより、学生の実態を把握し、さらに、履修科目の評価や意識が、教育実習評価との間に、どのような関連性を持っているかを調べた。以下、主な結果について述べる。

(1) 意識調査では、幼稚園(保育園)の先生のための理想的な資質を考慮し、8つの枠組みを設定し、18項目を設定した。単純集計の結果、幼稚園(保育園)の先生を目指し始めた時期としては、中学生が一番多く、中学卒業までに、8割の学生がこの仕事に

つこうと決めている。また、約7割の学生がその気持ちは今も変わらないと答えているが、全員が幼稚園免許および保育士の資格を目指して入学してきたにもかかわらず、3割の学生がその職種に迷いを感じていることもわかった。これらの学生については、個別にその理由等を把握し、適切な指導を行う必要がある。

(2) 性格的な自己評価からは、表情が豊かで感性が豊かで、元気という姿の一端が浮かび上がってきた。これは幼児教育に携わる者の資質としては重要なことである。

(3) 意識調査18項目の因子分析結果からは、「心身の健康」、「子ども好き」、「積極性」という3つの因子が抽出された。それぞれの因子得点を求め、上位4分の1と下位4分の1の者を取り出し、教育実習評価とのクロス表を作成した。これより、統計的に有意な結果は得られていないものの、それぞれの因子得点が高い者は、比較的高い評価を得ているという傾向がみられた。

(4) 教育実習評価を得点化し、因子得点の高群、低群における平均値の検定を行った。その結果、「積極性」因子については、高群の平均値は5%水準で有意に高かった。すなわち、何にでも興味を持ち、人前で話すことが好きで、子どもをみかけるとつい話しかけてしまうという、前向きで、対人関係が比較的うまくいっていると考えられる学生は、実習でも、そうでない学生よりは、高い評価を得ていると考えられる。したがって、事前指導においては、コミュニケーションの取り方やプレゼンテーションの方法なども内容のひとつとして加えられるのではないだろうか。

(5) 履修科目を講義系、実技系に分類し、その学習成績と教育実習評価との関連を調べた。各科目の成績を得点化し、その上位4分の1と下位4分の1の者を取り出し、それらと教育実習評価とのクロス表を作成した。その結果、両科目とも、科目成績の高群の方が教育実習評価においても高い評価

を得ている割合が高かったが、実技系の科目成績と教育実習評価との間には、5%水準で有意な差が見られた。両群の教育実習評価の平均値を検定した結果でも、実技系科目においては5%水準で有意な差が認められた。すなわち、実技科目が得意な者は、そうでない者よりも教育実習では比較的高い評価を得ていることがいえる。元来、幼稚園や保育園の先生の採用時には、実技、特にピアノの技術が高く評価されることはよく聞かれるが、教育実習においてもその傾向があるようだ。したがって、事前指導においては、教科に関する技術力を高める指導も重要となってくる。

## おわりに

教育実習のための事前指導は、あいさつの仕方や実習生としての望ましい服装、指導計画の書き方など教育実習に直接、関わってくる内容を指すことが多い。しかし、短い実習期間の中で将来のためにできるだけ多くのことを学んできてほしい、そのためには教育実習に行くまでにできるだけだけの指導をしたいと願うのは、養成校の教官に共通の願いであろうと考える。そうであれば、事前指導とは前述した狭義の内容だけではなく、開講されている科目の学習や人間性の育成や技術の習得など、もっと幅広い内容を含んだトータルなものとして捕らえなければならないのではないだろうか。

今回の調査では、その入り口として教育実習の評価に焦点をあてて、学生の側からのアプローチを試みた。しかし、意識調査ひとつを取り上げてはまだ十分なものとはいえない。これから、より多くの側面からの研究を経て、ひとつひとつの結果をよりよい事前

指導、ひいてはより質の高い幼児教育者の育成に役立てていきたいと考えている。

### 〈文 献〉

- 文部省「幼稚園教育要領」1998年  
幼児保育研究会「最新保育資料集」ミネルヴァ書房、1999年  
秋山和夫「教育実習」北大路書房、1996年  
鈴木政次郎他「教育・保育実習要論」教育出版、1995年  
教育職員養成審議会答申「教員の資質能力向上方策等について」1989年  
実習問題研究会「保育所・幼稚園実習のすべて」相川書房、1995年  
教育・保育実習を考える会「幼稚園・保育園実習の常識」蒼丘書林、  
柳井晴夫「多変量データ解析法」朝倉書店、1994年  
石村貞夫「SPSSによる多変量データ解析の手順」1999年

注) 本稿におけるデータ解析にはSPSS 7.5J for Windowsを使用した

—児童教育学科 幼児教育—